

# 自分で伝えたいことを見つけて それを伝えていくアナウンサーでいたい……!

キリマンジャロの頂上に立つ仲山さん



横浜出身のアナウンサーとして、1996年にデビュー。「知る」ということに、徹底した姿勢で取り組む。食の取材をしていたことから、「フレイクエキスパート」の資格も取得した。趣味は「秘境旅行」で、中東、アフリカ、中南米などで世界32カ国を巡り、キリマンジャロ(5895m)への登頂も経験。今一番やりたいことは「宇宙旅行」と話す仲山さんは、毎年10月、ニュース番組で「赤い羽根」を着けて出演する、共同募金運動の広報ボランティアでもある。現在、一児の母として子育て中でもあり、仕事と子育てを通じて、そのワークライフをインタビューした。

## tVkアナウンサー 仲山 令子さんを訪ねて



アナウンススクールなどで、ある程度経験を つんでからアナウンサーになるケースも多い中で、全く経験無しでこの世界に入ったという。

——アナウンサーになるううとしたきっかけは……?  
仲山 幼い頃から、知らない世界の事を教えてくれる本を読むことが大好きでした。そんな小学生の時、図書館にあった「ロバート・キヤバ(注)」の本を読んで、報道に興味を持ちました。その後、中学生の時に「チェルノ

ブイリ原子力発電所事故」(1986年/旧ソ連)があり、世の中には怖いことがあるのだと衝撃を受けました。同時に、日本の核対策について調べてみると、シェルターなどによる充分な対応策が無いことが分かり、この現状をもっと伝えていかなければならないと思ったのがきっかけです。

(注)1883-1954年。第二次世界大戦など、五つの戦争を取材したアメリカの戦場カメラマン。

——全く経験がなく、苦労もあったのでは……?  
仲山 大学時代に、演劇研究会に所属していたので、発声練習はしていました。原稿の読み方など基本的な部分で、アナウンスと演劇は全く違うもので、すので、新人の頃は、短い原稿一つ読むのにもかなり苦労しました。どうすればよいかも分からず、まさに手探り。とにかくより練習するしかないと、よく居残り練習をしていました。でも、そのおかげで、当時一番苦手

だったナレーションは、今、好きな仕事の一つです。最初は本当に出来るようになるんだらうかと不安でいっぱいでしたが、今は努力は人を裏切らないと感じています。

アナウンサーという職業は、情報伝達に極めて高い正確性が求められ、同時にその情報に社会に与える影響も大きい。特に、ニュースなどの生放送番組では、時間内の伝達力に加えて、臨機応変の判断力、対応力が常に要求される。

——生放送番組を担当するところが多いようですが……?  
仲山 一秒でもこぼれる(言葉が途切れると)、大きな問題になるので「一秒の重さ」をすごく感じます。新人の頃、電子レンジを使うときは、待ち時間中フツツと二人で話をしながら、これが三分かという時間感覚をつかんだりしていました。

また、作品は細かい「秒」を積み重ねて出来ていて、「一秒のシーンを挟むこと」によって、映像効果や見た人の印象が全く違ってくるので、時間単位で進まない「秒」が与える影響の大きさもすごく感じます。だから、細かい部分を大事に表現していくことを意識しています。

——「伝え上手」になる方法は

……?  
仲山 視聴者がいるからこそ、伝えることが出来るので、放送時間帯によって、誰がどんな気持ちで見ているのかを、常にイメージしています。例えば、夜遅くに寝て帰ってきた人が、弾丸のように速いスピードで話すニュース報道を見たら疲れますよね。だから、そういう時は、低めの声でゆったり伝えることを意識したりします。放送に限らず、何をするのも、まず相手のことを考えて行動することが大切だと思います。

——日々の体調管理は……?  
仲山 自分の任された仕事には責任を持ちたいので、体調管理は意識します。特に、食べる物には、気を付けています。時間があまりなく、デスクで食べる機会が多いので、有機野菜などを使った手作り弁当を必ず持ってきています。そのせいか、辛いことに、これまで病気などで代役をお願ひしたり、というようなどきはありません。

現在、子育て中でもある仲山さん。CM出演「tVkハウジングプラザ」を始め、地元雑誌のモデルや、国が推進する「ワークライフバランス」(仕事と生活の調和)の県内推進会議の委員にも就任するなど

……?  
仲山 推進会議は、仕事と生活が調和した社会を作るために、大学教授や行政、労働関係者などで組織されたもので、私はテレビ局の代表として、また働く母親の立場で就任(発言)しました。不況の中、ワーク・ライフ・バランスを考えたても考えられない企業も多く、特に、中小企業をサポートする仕組みを作ることが大切だと感じました。

——働く母親として実感していることは……?  
仲山 両親が離れた所に住んでいるので、子どもの送り迎えなどが必要なときは、近所の方にお願いしています。もちろん、お願ひしてばかりでは申し訳ないので、逆に私が出来ることを探して、少しでもお返しできないか考

えています。仕事と子育ての両立は、まわりの支えが無いと難しいので、甘えではない「支え合い」の必要性を感じています。

——自身のワーク・ライフ・バランスは……?  
仲山 私の場合、仕事と生活は切り離されたものではなく、一掃になつてバランスが取れている感じ。プライベートでは、よく海外に旅行に行くのですが、実際にその場所に行つて、その空気を吸い、地元の人たちと話さないと思つてられないのがたくさんあります。そんな新たな発見をした時も、常に「どういう風に伝えたらいいかな」と、ついつい仕事に絡めて考えてしまいがちです。また、突然、旅行に限らずですが、知らない世界のことを見たり知ったりすることが、取材などで初めて会う人の理解を深める知識となつたり、共通の話題が広がるきっかけになつたりと、仕事に活かせることも多いです。自由に好奇心の翼を広げることが、そのまま仕事に役立っている。それがこの仕事が好き。な理由の一つでもあります。私なりのワーク・ライフ・バランスの形なのかなと思います。



tVkアナウンサーとして、初めてニュース特集の企画制作を手掛け、未知への旺盛な

探究心と行動力によって、これからも視聴者の心に残る情報を発信する。

仲山 仕事を通して、知らないことをもっと知り、発見し、真実に近づいて伝えていきたい。自ら企画し、台本を書いて、使いたい映像を考え、それを実際に人に見てもらふ作業作りを、これからは、もっと手掛けていきたいと思っています。

ただし、番組作りも子育てと同様に、一人では何も出来ません。カメラマンをはじめ、多くの専門のスタッフと一緒に作り上げていくもの。そういった過程を楽しみながら、良いものを作りたいですね。

——これから取り上げていきたいテーマは……?  
仲山 「命」というものが、昔に比べて軽くなっていくように感じます。それは、人がお互いに関わりを持たなくなつてきて、案になつたこともある反面、必要な関わりまで薄れてきたからではないのでしょうか。以前から関心のあった終末期の医療をはじめ、「命」をテーマにして、色々な形で、命の大切さを発信していきたいと思っています。

聞き手 神奈川県共同募金会 事務局次長 中島孝夫